

研究ノート

## 岡山の被差別部落とキリスト教

——一九世紀後半から二〇世紀初頭、アメリカン・ボードと岡山基督教会の活動——

友寄 景方

### 要 約

岡山の被差別部落である竹田村で、一九世紀後半、プロテスタント・キリスト教の宣教団体アメリカン・ボードがキリスト教宣教活動を行っていた史実は、これまでの先行研究で明らかにされてきた。本稿では、その活動に携わっていたアメリカ人宣教師の手による、これまで未発表の報告書を用いる。報告書には、竹田村でどのような活動が展開されていたかが記されていた。そこから、キリスト教がその使信として持つ「兄弟愛の原理」が、被差別部落の人びとを引きつけた様子がうかがえるのである。

### はじめに

本稿では、岡山の被差別部落・竹田村と、アメリカのプロテスタント・キリスト教宣教団体であるアメリカン・ボード (American Board of Commissioners for For-

eign Missions, 以下ボード)、またその宣教によって成立した日本組合教会岡山基督教会 (現在の日本基督教団岡山教会) との関係について探る<sup>(1)</sup>。既に、隅谷三喜男氏、守屋茂氏、竹中正夫氏、工藤英一氏各氏の先駆的な研究によって、この史実は明らかにされてきた。特に、竹中氏は、ボードの宣教師が作成した年次報告を使用して、

このことを指摘している。<sup>(2)</sup>

ここでは、現在まで未発表であるボードの宣教師であったO・ケリー (Oris Cary, 1851-1932) が書いた一八八一年の「岡山ステーション第三回年次報告」から一八八四年の「岡山ステーション第六回年次報告」<sup>(3)</sup>を軸にして、日本での当時の様子を伝えるキリスト教の週刊新聞『七一雑報』<sup>(4)</sup>などの史料から、その関係を概観する。

## 一 ボードの活動と岡山基督教会の設立

明治維新以降、プロテスタント・キリスト教のなかで、岡山において宣教の先鞭をつけたのが、ボードで、その端緒は、一八七五年に岡山を訪問したボード宣教師のW・テイラーである。その後、一八七七年から、神戸、京都より、宣教師であるJ・L・アッキンソン、J・E・ダッドリー、M・J・バロースや、同志社の神学生であった金森通倫らによる本格的ではあるが、短期滞在・訪問型の伝道活動が始められた。その上で、一八七九年四月には、ボードの岡山ミッション・ステーションが設置された。このミッション・ステーションには、医師であるJ・C・ベリー夫妻、O・ケリー夫妻、J・H・ペテイ夫妻、J・ウイルソンが派遣され、同年六月には、金

森通倫も岡山での伝道に加わった。そして一八八〇年一月一三日に、三三人の信徒により、岡山基督教会が設立され、金森が初代の牧師に就任した。<sup>(5)</sup>

ところで、竹田村に関する最も早い報道は、中国・四国地方での伝道を報じた『七一雑報』三卷二三号(一八七八年六月七日)に見られる。一八七八年五月「四日ハ午後二時ごろより中川氏同道にて当所を離る、事十五六町東北に竹田村と唱る新平民の村あり此村に行しが此地の実況を見聞するに隣村に尋常平民の村ありて互に両村の得失を図り且ハ交誼を篤くせんと竹田村に会議所を設立せしに旧平民は聊さか嫌疑の心なく新民と集会して両村に關係する農の事務を協議し互いに村内の利益を論じ加之開化に着目し自由の理を述べ近頃中川氏社中の演説を此集会所に設くといふ。今会場を見るに旧民ハ新民に對して侮らず新民ハ謙遜して席をゆづる等其情義未だ他に列を聞ず即ハち感じて約翰伝一章二十三節を説明す後席ハ教師の講義にて聴聞人の満面に感じたる様をあらはすに至る凡て此村の男子の容儀を見るに実に従前穢多と唱ふる鄙態を蟬脱せるものと見へたり」。

ここで、読まれた「約翰伝」、つまりヨハネによる福音書の第一章一二節と一三節は、次のようになっていゝ。「しかし、言は、自分を受け入れた人、その名を信じる人々

には神の子となる資格を与えた。この人々は、血によつてではなく、肉の欲によつてではなく、人の欲によつてもなく、神によつて生まれたのである」(『新共同訳聖書』日本聖書協会、一九八七年)。

同年夏の「先頃伝道の為備前の岡山へ行れし金森氏」(『七一雑報』三卷三六号「一八七八年九月六日」)、つまり金森通倫の活動に関する記事でも、竹田村は宣教の対象地となっていた。「岡山を去る十二三丁程の所に竹田村と云村あり新平民の住む処なり初にハアツキンソン氏が行き其後ハ岡山より一二の信者が安息日毎に道の話にゆきゐたりしが金森氏出張後ハ水曜日曜の両日に説教に行れし所ますく信者も増し酒煙草を廃止して神に使えんとする人七八人も有り其他志のある人も多く説教の時に集まる人ハ四五十人より百人に至れりと」と、竹田村での集會が盛況であることを伝えている。

この宣教活動は、金森通倫が去つた後も、「備前の岡山にてハ毎火曜日山下久治氏の宅にて長田時行氏道の説をいたされ日曜日毎にハ竹田村にて説教さる、が聴聞人も多く追々盛なる由該地より報」(『七一雑報』三卷三九号「一八七八年九月二七日」)と、継続されていた。同年末の『七一雑報』三卷五三三号(一八七八年二月二七日)は、一八七八年の全国各地のキリスト教伝道を回顧する記事

のなかで、「備前ハ岡山に既に数名の信者あり道を講ず近傍竹田村も同段なり」と指摘している。

ついで『七一雑報』四卷一七号(一八七九年四月二五日)は、「竹田村も相かはらず安息日の夜ごとにハ岡山より一二の信者行て伝道することなるが是また追々盛んなり去る十二日長田時行氏と竹田村の信者中塚栄二郎氏と共に岡山より三里程東北にあたる篠岡村に行て集りを開きしに始めに似合ず質問等之あるを見れば日ならず好果を結び盛んになるべし其他県下所々に聖教を渴望する勢あり」と報じている。「竹田村の信者中塚栄二郎氏」という一文の、「信者」という表現に注意したい。既に、中塚は、洗礼こそ受けてはいないものの、周囲から、キリスト教徒と認識されていたのであろう。

さらに、一八八〇年一〇月に岡山基督教会が創立された後の「岡山ステーション第三回年次報告」(一八八一年四月)から、「竹田村(岡山の北およそ一・五マイルにある穢多村)」(Takeda Mura [Eta village about 1 1/2 miles north of Okayama])とのタイトルで記録されている。竹田村に関する部分を見ていこう。

## 二 キリスト教に入信した竹田村の人びと

この村での活動は、活動の対象となる人々の階層のゆえに、常に特別の関心を寄せられている。竹田村の五人が、岡山教会の会員である。年間を通じて、毎週一回夕方、岡山教会の信徒の助けによつて集会が守られており、最近の平均出席者はおよそ二〇人である。これ以外に、数か月間にわたつて竹田村の信徒は、竹田村のために祈祷会を自分たちで持ち、最近では日曜日の夕拝を守るようになっていた。各々の信徒は三、四人の友を選び、その人たちの救いのために特に祈り、働くようになっていた。金森氏が竹田村で三夕連続して説教を行つて以来、短期間のことである。金森氏は初め、彼の話を最後まで聞くためにどの集会にも出席すると約束を出席者から取り付けていた。最後の夕に、金森氏は人々に、何事も起こらず、できるだけ静かに過ごすように求めた。そのために人々の注意がとられ、人々がキリスト教の主張を十分に考えることができないうことがないようにするためであった。しかしその翌日の夕刻、竹田村の信徒の一人が教会の祈祷会にやつてきて、川が増水し村の近くの土手が決壊しそんであ

り、人々は皆忙しく差し迫る大災害を防ごうとしていた。との報告を行つた。危険はまだ去つていなかった。金森氏は当然にもこの考え方にいくぶん失望し、この出来事とそれに伴う興奮状態が、彼が人々に語つたことから人々の考えをそらせてしまふのではないかと恐れた。彼はその知らせを報告した人の求めを（原文判読不能）。それは、危険が去り、竹田村での神の業が損失を被らないように、キリスト者が竹田村のために祈つてほしいという求めであった。その後熱心な祈りの期間が持たれ、信徒の中には竹田村に対する神の祝福のために二度、三度祈る者もあつた。それは、キリスト教が、過去においてこの国が決して知らなかつたような兄弟愛の原理を導き入れることによつて、階級的偏見の障壁を取り壊しつつかある興味深い例証であつた。

報告の中で、金森が、竹田村の人びとが土手の決壊を防ごうとしている努力について「失望」したとされている。災害から身を守る努力は当然で、金森の受け止め方は浮世離れしていると言えるだろう。一方で、現代でもキリスト教の伝統の中で、静ひつのうち神について思いを巡らすという行為はあるので、同様の事を金森が要求したのだろうか。

また、「竹田村の五人が、岡山教会の会員である」と

いう記述は重要である。岡山基督教会創設時の会員三三人のうち、設立式に合わせて洗礼を受けた者が二七人、他教会からの転入者が六人となっている。

第三回年次報告の後、第四回から第六回までの年次報告での記述は短いものなので、続けて記そう。

年間を通じてこの村では、岡山教会の会員によって、毎週の集會が開かれたが、進歩はほとんど見られなかった。竹田村の新しい階層の人々と接触しようとして、ミス・タルカットは女性のための集會を始めようとしていたが、彼女が神戸に移ったため、計画は挫折した。子供と青年のための集會はまだ始められたばかりであるが、活動に新たな有益な影響を与えると期待されている。

この村では、事態に特別な変化はなかった。毎週の集會は守られているが、教会員以外の出席はほとんどない。竹田村の一人の女性が、一月に岡山教会に結ばれた。

年間の大半を通じて、この村では特別の活動はなかった、岡山と近いため、信徒は岡山市での礼拝に出席するのが容易である。一、二名の教会員の状況は、懸念を起こさせるようなものであった。この報告書の対象となる年度の末に、説教礼拝のための準備がなされ

ているが、幾人かの新規来聴者があるものと期待されている。

第六回年次報告の後、一八八五年以降の岡山ステーション年次報告には、竹田村についての報告はない。『七一雑報』においても、一八七九年四月二五日の四卷一七号を最後に、竹田村への言及はなくなっている。竹田村に対するボード、また岡山基督教会による組織的な宣教活動は、一八八四年に終わりを告げたように考えられるが、その理由は現在のところわからない。

けれども、安部磯雄が自叙伝『社会主義者となるまで』に記しているように、すくなくとも一八八七年時点では、竹田村出身者も、岡山基督教会のメンバーだった。

### 三 河本乙五郎の活動

この後、一九〇二年に、河本乙五郎という岡山基督教会の信徒による、竹田村での活動が見られる。河本は、一九二八年、内務大臣による融和事業功労者として、また社会事業功労者として表彰を受けている。『融和事業功労者事蹟』に掲載された河本の項のなかに、竹田村の名前が出てくる。「氏は部落解放の爲め愈々志を堅くし、本問題の解決には特に、宗教的教化を基調とせざるべか

らざる事を痛感し、明治三十五年竹田村内部落有志の懇請に感激し、同所に日曜学校を創設し、次で託児所を設け、同部落有志の懸命なる努力に依り住民の精神的覚醒を促し、常に部落各戸を訪ねて親しく児童及びその父兄に接し、各家庭の相談相手となり、或は多数失業者の爲めに職を求め、之が生活の安定を期する等、終始部落の向上に専念尽力した。其後氏は広く日曜学校運動に尽瘁する所があつたが、その間常に済生と融和事業には少なからざる努力を費した<sup>12</sup>。

ボード、岡山基督教会の活動終了後、一八年を経て新たに日曜学校を形成したとなっているのだが、このことについて、『岡山基督教会五十年小史』、『日本基督教団岡山教会小史』、『岡山教会百年史 上巻』には、記述がない。しかし、『恩寵の経験』によれば、「明治三十五年には石井十次、ペテー、炭谷小梅諸氏の援助のもとに竹田日曜学校を開き、河本先生自らその主任者として、岡山教会執事、岡山教会日曜学校長、南部日曜学校長の外に、毎日曜一里の竹田村に赴きて児童の宗教々育に当られたのである<sup>13</sup>」という。この活動が、いつまで存続し、どのような内容であつたかは、現在のところ、不明である。

## おわりに

竹田村へは、ボードの宣教師たちが岡山での伝道にあつて頼りにしていた中川横太郎が案内したことによつて、キリスト教の宣教活動が始められたのではあるが、なぜ、宣教師たちは、被差別部落である竹田村に関心をもち、活動を継続したのだろうか。「岡山ステーション第三回年次報告」にある、O・ケリーの「それは、キリスト教が、過去においてこの国が決して知らなかつたような兄弟愛の原理を導き入れることによつて、階級的偏見の障壁を取り壊しつつある興味深い例証であつた」という記述に注目したい。

「過去においてこの国が決して知らなかつたような兄弟愛の原理を導き入れること」、このことこそ、ボードに所属し、日本に派遣されてきたアメリカ人宣教師たちが、共通して持っていたキリスト教信仰の理解といえるのではないだろうか。

岡山と直接の関係は持たなかつたが、ボードの最初の来日宣教師であつたD・C・グリーンは、一八九九年に、日本における彼の宣教活動を回顧して、次のように書いている。「彼（引用者注―D・C・グリーン）の言明した

ところによれば、日本のキリスト教宣教のなかで、『人間の価値についての新しい概念』（傍点「原文ではイタリアック」はD・C・グリーンによる）が主たる収穫だった。つまり、その概念とは『全ての男性、女性、子供は、天にいます私たちの父、唯一の生ける神との直接的で、また、個人的な関係のなかにいる、というものである。言い換えれば、どんなに地位が低かろうが、全ての人間は神の子供であり、また、それにふさわしい尊厳が付与されている』。キリスト教の比較的小さなグループならば、一番よく、この思想の十全な意味を味わうことができるだろう。しかしながら、個人の価値と尊厳を新しく生み出したその影響は、もつと広大な範囲に及んだ。そして、最近の国家的進歩の主因となった。この概念は『必ずしもキリスト教徒のみによって言明されたものではない。しかし、この概念は、それでもやはり、キリスト教的なものなのである』<sup>15</sup>。

O・ケリーが述べる「兄弟愛の原理」は、D・C・グリーンが言うところの、神の前では、全ての人は神の子供であるという「人間の価値についての新しい概念」に裏付けられたものであっただろう。そして、安部磯雄が、その自叙伝に記しているような「博愛主義であり、平等主義であり、平民主義」というキリスト教が、岡山の竹

田村に伝えられたことが、安部自身が述懐しているように「基督教に引き附けられたのも全くこの精神のためであつた」という状態と同様に、被差別部落の人びとを引き付けたのではなかったのだろうか<sup>16</sup>。

## 注

(1) アメリカン・ボードと日本伝道については、吉田亮「総合化するアメリカン・ボードの伝道事業―日本進出期の教派協力、教育、出版活動を対照して―」、茂義樹「アメリカン・ボードの日本伝道と教会の形成」(いずれも、同志社大学人文科学研究編『来日アメリカ宣教師―アメリカン・ボード宣教師書簡の研究 一八六九―一八九〇―』現代史料出版、一九九九年所収)を参照。

(2) 隅谷三喜男「社会問題とキリスト教―隣人愛の社会的性格―」(隅谷三喜男『日本社会とキリスト教』東京大学出版会、一九五四年所収)六七―六八頁。守屋茂『近代岡山県社会事業史』岡山県社会事業史刊行会、一九六〇年、六一―八頁。竹中正夫「初代の教会」(竹中正夫『真人の共同体』新教出版社、一九六二年所収)四五―四八頁。工藤英一「部落問題とキリスト教」(工藤英一『社会運動とキリスト教―天皇制・部落差別・鉅毒との闘い―改訂増補版』日本YMCA同盟出版部、一九七九年所

収)八一〜八五頁。

隅谷氏は、安部磯雄の自叙伝『社会主義者となるまで』から、安部が岡山基督教会の牧師を務めていた時代の回想で、竹田村との関係を記した部分を指摘している。『社会主義者となるまで』は、一九三二年の改造社版と、一九四七年の明善社版の二種類があり、ページに異同がある。竹中氏、工藤氏も引用しており、重要な資料なので、関係部分を書き出しておく。

「然し一方には特殊部落の中から教会員になった人があつた。岡山の隣接地に竹田村といふ特殊部落があつた。其処から中塚なかづかといふ一家族が率先して岡山教会員となつた。其家には多少の資産があつたのみでなく、主人には相当の教養があつた。毎日曜の午前には教会堂で日曜学校が開かれ、幾組にも分れてバイブルの講義を聴くことになつて居た。教師は教会員中の元老が務めるのであつて、中塚も其一人であつた。其当時中塚は四十五六歳位であつたと思ふが彼の講義を聴く者は多く六十歳以上の老人であつた。其中には旧藩時代の士族階級に属する者が一二名あつた。私は赴任後此光景を見て感激に堪へなかつた。基督教の精神が博愛主義であり、平等主義であり、平民主義であることは同志社時代に於て充分に会得して居た。私が基督教に引き附けられたのも全くこの精

神のためであつたと言ひ得る。然るに明治二十年の頃昔の武士が特殊部落の人からバイブルの講義を聴いて居るのを見た時私はこれが即ち基督教の力だなど感ぜざるを得なかつた」(改造社版一四四頁、光善社版一四〇頁。両者の文章は、句読点に至るまで異同はない。「中塚」のみ、ルビをふつた)。

なお、安部は一八八七年以降、九一年から九五年に帰国するまでのアメリカ留学を挟んで、九七年まで、岡山基督教会の牧師を務めた。

守屋氏は、三好伊平次調査手録『岡山県同和事業年表』を根拠としている。

竹中氏は、初めて『七一雑報』に見られる竹田村伝道の記事を使用。隅谷氏と同様、安部磯雄の自叙伝の同一部分を引用している。ボードの年次報告書であるSecond Annual Report of Okayama Station by Oris Carry, May 1880.も使用して、同文書に基づき、竹田村には「明治十二年には熱心な者が十二、三人存在し、なかには定期的に岡山の集会に出席する者もあつた」(『真人の共同体』四六頁)ことを指摘している。

工藤氏の論文は、『七一雑報』、安部磯雄の自叙伝を用い、竹中氏の論文とはほぼ同様の構成である。

(3) これらの年次報告は手書きの英語文書であり、ボード



の日本伝道関係の文書とともにマイクロ・フィルム化され、『アメリカン・ボード宣教師文書』として同志社大学人文科学研究所に所蔵されている。本稿の作成にあたって、同研究所のものを使用させていただいた。

- (4) 『七一雑報』について、土肥昭夫氏の説明を引いておく。  
 「アメリカン・ボード宣教師 O・H・ギューリック (Oramel H. Gulick, 1830-1923) の指導と援助の下に、(中略) 週刊新聞『七一雑報』(一八七五・一二・二七—一八八三・七・三) が刊行された。これは教派に関係なくキリスト教界の情報、キリスト教の平易な解説をのせるのみではなく、文明開化にふさわしく、家庭、衛生、建築、その他日常生活に関係するさまざまな問題を取りあげ、その改善を唱えたものであり、その内容も一般民衆が読めるように平易に述べられており、その意味では独創的な刊行物であった」(土肥昭夫『日本プロテスタント・キリスト教史』新教出版社、一九八〇年、七六頁)。
- (5) この部分は、竹中正夫「岡山県における初期の教会形成」(同志社大学人文科学研究所第二研究「キリスト教社会問題研究会」編『キリスト教社会問題研究 第三号』同志社大学人文科学研究所第二研究「キリスト教社会問題研究会」、一九五九年所収)に基づいている。
- なお、Otis Cary, *A History of Christianity in Japan*,

second edition, Charles E. Tuttle, 1976 (first edition, 1909) に、一八七五年の W・テイラーの岡山市訪問 (volume two, pp.119-120) 一八七九年に J・C・ベリ、J・H・ペテイ、O・ケリー、J・ウィルソンが岡山に派遣されたこと (ibid., p.146) が記されている。

- (6) 「岡山ステーション第三回年次報告 O・ケリー一八八一年四月一日」(Third Annual Report of Okayama Station, O. Cary, 1881.4, pp.13-15) (『アメリカン・ボード宣教師文書』マイクロ・フィルム Roll 6)。

- (7) 小野田元編『岡山基督教会五十年小史』岡山基督教会、一九三〇年、二頁。岡山教会史編集委員編『日本基督教会岡山教会小史』日本基督教会岡山教会、一九五五年、四〜五頁。日本基督教会岡山教会編『岡山教会百年史上巻』日本基督教会岡山教会、一九八五年、二七頁。

『七一雑報』五巻四三号(一八八〇年一〇月二二日)に掲載された「備前岡山に教会設立せし事」では、「新島氏ハ男十五人女十二人合せて二十七人に洗礼を施し(但し此他に他会より入会せし者五人あり合せて三十二人の教会なり)」と、男女二七人が洗礼を受けたとなっている。アメリカン・ボードの機関誌であった月刊誌『The Missionary Herald』(Vol. XXVII-February, 1881-No. II) の LETTERS FROM THE MISSIONS に掲載された、

テイによる CHURCH ORGANIZED AT OKAYAMA では、牧師としての金森のほか、三十一人の会員 (thirty-two members) となっている (p.56)。

なお、村田富編『大西絹子先生余芳』(村田富、一九三四年〔復刻一九九二年、大空社〕)に収められた河本乙五郎による「大西絹子刀自の功績」の中では、「明治十三年十月岡山基督教会創立に当り、全国基督教会に於て恐らく前後稀有の一大事実が現はれたのである。即ち教会創立者の中四名の内部同胞あり、然も全く自由平等の待遇により 同胞二十八名に伍し、堅き握手の下に共同団結したのであつた」(三九頁)と、「四名の内部同胞」とされている。一方で、小野田哲彌『炭谷小梅姉追懐録』(林源十郎、一九四一年)に収められた河本乙五郎の回顧によれば、中川横太郎と金森通倫が「当時最も悲境に在りし或る同胞」、「或貧しき人」、つまり被差別部落の人びとにキリスト教を伝道し、「明治十二年十月十三日岡山教会の創立第一歩に当り、此青年が涕と共に基督教の愛を語つた事と、同時に彼の同胞五人も洗礼を領した」(八七頁)と、「五名」に訂正されている。

岡山基督教会で一九〇七年に洗礼を受けたという佐々木親による『恩寵の経験』(佐々木親、一九五五年)には、「市外竹田村落同胞に対して(中略)宣教師テラー

博士、伝道師金森通倫氏の如きは屢々同村に至つて伝道教化の任に当り、其の結果明治十三年十月岡山教会創立に當つて、創立者三十七名中五名の部落同胞があつたのである」とある。「創立者三十七名」は明らかに誤りであるが、「創立者」とは岡山基督教会の設立に合わせて洗礼を受けた人、「三」を「二」の誤植または誤記と考えれば、二七人の受洗者のうち、五人が竹田村出身者と見られるのではないだろうか。そうであれば、O・ケリーの年次報告と一致する。二七人の受洗入会者の氏名を、『岡山基督教会五十年小史』(二頁)、『日本基督教団岡山教会小史』(五頁)、『岡山教会百年史 上巻』(三七頁)に基づいて記しておく。『岡山基督教会五十年小史』、『日本基督教団岡山教会小史』では、「丸毛真応、宮路克己、吉岡正矩、山田市太郎、佐々木盛永、中塚栄次、山崎長衛、有松才次郎、武田五郎作、葛原安次郎、森環、大賀寿吉、二宮邦二郎、三宅京三郎、中川堅市、佐々木やゑ、中塚とわ、中川ゆき、大西ひで、大西きぬ、岸本もと、木全かよ、加藤みね、加藤はる、草加うめ、三宅つる、多賀たき」となっている。『岡山教会百年史 上巻』では、このうち、「宮路克己」が「宮路克」に、「大西きぬ」が「大西絹」と変わっている。

(8)「岡山ステーション第四回年次報告 O・ケリー」

- 八八二年四月一日」(Fourth Annual Report of Okayama Station, O. Cary, 1882.4.1, pp.8-9) [『アメリカン・ボード宣教師文書』マイクロ・フィルム Roll 7]。
- (9) 「岡山ステーション第五回年次報告 O・ケリー 一八八三年四月一日」(Fifth Annual Report of Okayama Station, O. Cary, 1883.4.1, p. 5) [『アメリカン・ボード宣教師文書』マイクロ・フィルム Roll 7]。
- (10) 「岡山ステーション第六回年次報告 O・ケリー 一八八四年四月一日」(Sixth Annual Report of Okayama Station, O. Cary, 1884.4.1, p.4) [『アメリカン・ボード宣教師文書』マイクロ・フィルム Roll 7]。
- (11) 注(2)の『社会主義者となるまで』の引用箇所を参照。
- (12) 中央融和事業協会編『融和事業功労者事蹟』中央融和事業協会、一九三二年、三〇六頁。内務省社会局編『社会事業功労者事蹟』(内務省社会局、一九二九年)では、「明治三十五年には、竹田村に日曜学校を創立して、親しく少数同胞児童及びその父兄に接して、指導教化に従事した。その努力によつて、改善発達の実績実に著しいものがあつた」(四九六頁)となっている。河本については、『融和事業功労者事蹟』、『社会事業功労者事蹟』のほか、警醒社編『信仰三十年基督者列伝』(警醒社書店、一九二二年)九二頁、大久保利武『日本に於けるベリ翁』(東京保護会、一九二九年)一五六〜一六〇頁、岡山県・岡山県社会事業協会『岡山県済世制度二十年史』(一九三六年)三〇五〜三〇六頁を参照。
- (13) 佐々木親『恩寵の経験』佐々木親、一九五五年、一〇〜一一頁。文中の石井十次は、岡山孤児院の創設者である。炭谷小梅については、『信仰三十年基督者列伝』の二三五〜二三六頁、また『炭谷小梅姉追懐録』を参照。
- (14) 『山陽新報』七五二四号(一九〇四年三月一五日)に掲載された杉山亀五郎「新平民(承前)(上道郡宇野村大字竹田を紹介す)」に、「全(引用者注・明治)五年に至り余が叔父中川横太郎聊か見る所あり先づ教育の普及を計らんとて新平民の子弟七十餘人を高木塾に入らしむ」、「其後伯父は亦宗教を紹介して彼等が逆境の苦痛を慰藉せんとして基督教を講じ米人アツキソンセ、<sup>(ママ)</sup>ベレ、ケレー、トウカツの諸氏を招待し其他金森通倫、長崎牧師の如き每一週間毎に講演をせられたり然れども真の信徒は僅かに五六名なりき」とある。中川については、杉謙二編『岡山県名鑑』岡山県名鑑編纂所、一九一一年、二二〜二三頁を参照。
- (15) Everts Boutell Greene, A New-Englander in Japan Daniel Crosby Greene, Houghton Mifflin, Boston, 1927, p.296. 隅谷三喜男「群馬キリスト教の社会的展開」(隅谷三

喜男『日本プロテスタント史論』新教出版社、一九八三年所収）九〇〜九一頁に、同じ箇所が引用されているが、訳文は異なる。D・C・グリーンについては、A New Englander in Japan Daniel Crosby Greene、また茂義樹『明治初期神戸伝道とD・C・グリーン』（新教出版社、一九八六年）を参照。

(16) 注意深い検討が必要ではあるが、河本乙五郎による竹田村出身の有松才二郎の談話は次のようになっていいる。「明治初年五箇條の御誓文と、其後太政官發布により四民平等の御布達が出た時は、数百年来の永きに亘り痛ましき厭迫<sup>ママ</sup>差別の酷遇を蒙りつゝ、あつた同族は暗夜の明け放れて旭の光を仰ぎ見る朗かな気分になりました。が然しながら事實は此に反し少しも融和の事實が挙らない。かうではなかつたと失望落胆した時に、始めて金森先生、中川横太郎氏等に御目にかゝり木全夫人、大西さん等の御宅へも度々招かれ、又私共の宅へも毎週一日来て下さつて親類同様の御交際を戴き、夢を見る様に嬉しくも思ひ、此世ながらの天国はこんなものだらうと涙をこぼして感謝致しました。それから基督教を研究し、なるほどあの方々の差別撤廢に忠実である事は、基督様の御精神であると悟り、此教の力ある実行の教へである事を知りました」(河本乙五郎「大西絹子刀自の功績」(『大西絹

子先生余考』、四〇―四一頁)。

付記

史料の引用にあたっては、差別語、差別的内容をもつものがあるが、歴史的史料として、そのまま引用した。また、できうる限り、漢字は旧字体を新字体に、変体仮名は平仮名に改めた。明らかな誤字には(ママ)を付した。

本文におけるボード宣教師の人名表記は、基本的に同志社大学人文科学研究所編『来日アメリカ宣教師―アメリカン・ボード宣教師書簡の研究 一八六九―一八九〇―』(現代史料出版、一九九九年)に従った。このため、引用した史料とは表記に相違がある。

『日本基督教団岡山教会小史』は同志社大学人文科学研究所蔵のものを、The Missionary Herald は神戸女学院大学図書館蔵のものを利用させていただいた。『山陽新報』、『岡山基督教会五十年小史』、『炭谷小梅姉追懐録』は岡山県総合文化センター所蔵のものを、『恩寵の経験』は教文館出版部所蔵のものを利用させていただいた。

また、竹田村に関する史料について明楽誠氏にご教示をいただいた。ここに記して、ご厚意に感謝する。